

<巻頭言>



会長就任にあたって

吉 越 洋*

平成19年5月の社団法人 日本大ダム会議第45回通常総会において私は同会議の第10代会長に選任されました。伝統のある日本大ダム会議の会長就任ということで、大変光栄に存じております。と、同時に、国内外のダムをめぐる厳しい情勢を考えると、改めて身の引き締まる思いが致しております。

私の少年時代には、ダムは自明的な善で、ダム技術者は憧れの職業の一つでありました。しかし、昨今、ダムを取り巻く環境は順風満帆とは参らず、自然破壊の元凶のごとく非難されることさえ珍しくなくなっております。

わが国には、現在、洪水調節、灌漑、都市用水、水力発電を目的とした、約2,800のダムがあり、諸先輩の大変な御努力によって建設されたこれらのダムは、わが国の社会基盤の充実及び経済成長に多大な貢献をしてきました。近代的なダム建設技術を取り入れて以降100年余りの営々たる努力により、数千人規模の洪水被害や広域的な渇水・旱魃等々の致命的な大災害は相当程度克服され、また安定した高品質の電力を享受できるようになりました。災害被害の軽減は、情報通信、交通網等全般的なインフラ整備による成果でありましようが、ダムが抜群の貢献をしている分野の一つであることは間違いのないと思います。ダム不要論まで云々される環境の中で、ダム技術者として、胸を張って主張すべきことが多々あるように感じられます。

一方、社会基盤が充実してきたことの裏返しとして、1980年代から90年代前半までコンスタントに年間200を超えていた建設中ダムの地点数が最近70数地点まで減少してきております。減少したとはいえ、この数は世界的にはまだまだ高い水準にあり、これは、急峻な山地が多く、急勾配な河川下流域に人口と資産が集中するというわが国土の特徴から、社会のさらなる安全・安心のためダム建設が必要とされている地域が多く残されているからと思います。

何れにせよ建設中のダム数が減少し、建設の槌音が途切れ途切れとなりつつあるのは現実であり、淋しい限りではありますが、これからは、先輩方が築かれた社会基盤設備を如何に維持・管理し、機能向上を図るかということが、建設に劣ら

* (社)日本大ダム会議 会長 (東京電力㈱) フェロー)

ず、益々われわれの重要な課題になってきているように感じられます。また、社会の環境保全に関する意識の高まりや異常気象による局地集中豪雨の頻発など最近の新しい情勢に対応して、ダム総合運用のさらなる工夫なども重要な課題となると思います。これらは、わが国のみならず、先進諸国に共通する趨勢かと思えます。このような背景のもとで、ダム技術者には、より高度な建設技術、維持管理技術が求められており、日本大ダム会議は重点事業として次の4項目を挙げております。

- 国際技術交流
- ダム及び貯水池に対する公共の理解
- 既設ダムの再評価、有効活用
- 技術的、社会的諸問題解決に寄与する研究

1点目の国際技術交流に関しては、国際大ダム会議や日中韓大ダム会議技術交流会などの場を通して、日本が必要とする技術を諸外国から国内に紹介するとともに、わが国の優れた技術をもって諸外国のダム建設に貢献することが必要と思えます。

2点目は、ダム貯水池の果たす役割と有効性が一般社会に正しく認識されるための活動であり、豊田前会長のもと「にっぽんダム物語」が発刊され、全国の学校等の教育機関に寄贈されました。今後さらに英語版を作成し、世界に発信するとともに、会員の皆様とともに着実な理解運動を進めていくことが必要であります。

3点目は、新規ダムの建設を検討する前に、当然、考えるべき事項であって、既設ダムの有効活用は今後とも重要な課題であり、運用方法、長寿化等に関する技術検討が必要になります。

4点目は、当会の特徴は治水、農業、電力などダムに関するすべての機関、企業、団体が構成されている点であり、会員が一致協力して、わが国で解決すべきダムに関する課題について、効率的に対処していく必要があることから、会員の皆様の御支援と御協力をお願い申し上げます。

私は、前会長から継承してこれらの課題に取り組んで参る所存ではありますが、何分力不足でありますので、会務の具体的運営にあたっては、執行部、事務局幹部の皆様と協議・調整を密にして足らざるを補い、遺漏なきを期したいと考えております。

会員各位には何卒よろしく御指導と御協力をお願い申し上げます。